

神宮式年遷宮の我国の伝統文化の原点としての意義

—ブルーノ・タウトの視点からの考察—

中村光彦

古代より、長い歴史を刻みながら続けられてきた神宮の式年遷宮は、本年一〇月に皇大神宮（内宮）、豊受大神宮（外宮）の第六二回目の式年遷宮が行われ、引き続き、別宮などの数々の宮社についての式年遷宮が平成二七年三月までに行われることとなっている。

式年遷宮は周知のように、二〇年毎に祭神を旧社殿より新社殿に御遷座するために、社殿を造替し、御神宝等を造り替えるものであるが、社殿を二〇年毎に造替する理由としては、萱葺屋根で、掘立柱で素木造りの社殿が朽損することのない耐久性が概ね二〇年程度であることや技術・技能を世代交代しつつ確実に伝承して行くためなどがあげられている。

このように御社殿の造替を繰り返すことにより、原型

を保持し永遠性を求める考え方は、中国伝来の仏教寺院や西欧の石造建築のように建物の物理的な永続性そのものに永遠性を求めようとする考え方に対して著しく異なるものであるといえる。ここでは、物理的な永続性よりも、建物は、劣化という自然現象に添い更新を重ねることにより、清新な姿での永続性を得ようとするものであり、正に自然の営みにも通じる生れ変わりによる永遠性であるといえる。

そして、そこに見られるものは、我国に仏教伝来とともに大陸より仏教寺院建築が伝えられる以前の、我国の歴史、風土に根差した我国固有の伝統・文化の原点ともいえる神道の社殿の原形である。

一九三三年に來日し、我国に三年余り滞在して、広く

我国の文化、建築にふれたドイツの世界的建築家ブルーノ・タウトは、来日直後に桂離宮を見てその素晴らしさに感動したことで知られているが、その後、更にその源流とも言える伊勢神宮を見て、こよなく感動したことも知られている。

タウトが来日した頃、我国では、明治維新以降に欧化趣味のもとに移入された西欧の伝統的様式建築が数多く建てられた後に、当時、世界的潮流になっていた近代合理主義によるモダニズム建築が建てられ、都市も近代の様相を呈し始めていたが、タウトは、我国でこれらの近代合理主義に基づいて建てられたモダニズム建築については未だ西欧の模倣の域を脱していないとして高く評価することはなかった。

タウトにとって、当時、我国に広まりつつあったモダニズム建築は、我国の歴史、風土との係りを全く持たない、未だ十分に咀嚼されたものでない、単に表面的に世界の流れを取り入れた借りものに過ぎないと映ったものと考えられる。

タウトは来日前より日本について強い興味と深い知識を有していたが、来日してから、各地を訪れる間に日本の建築や文化に広くふれ、近代化を短期間の間に成し遂げた我国の姿を見るにつけ、我国の伝統文化と西欧より

移入された近代文明との間に内在する問題や矛盾にも鋭く目を向けている。

タウトは、我国に滞在中に記した著書において、日本は西欧の近代文明・技術をいち早く学び、取り入れることには熱心で成功したが、その基となっている精神的なものや学ぶことは忘れたのではないかと述べて、当時の我国の西欧文明の移入による近代化の皮相性を指摘している。また更に、我国が西欧文明の移入に熱心なあまり、ともすれば自国の伝統文化の継承や理解へ熱心さを欠くことに危惧の念を表しており、他国の文化を深く理解するためには、先ず自国の文化への深い理解が欠かせないとも述べている。

タウトは我国各地を広く訪れるにつけ、我国の伝統文化の素晴らしさに触れ深く感動する一方で、単に上辺だけを模倣したもの（イカモノ）を多く見て強い不快の念をも記している。

タウトが来日直後に先ず目にして深く感動したのは桂離宮であり、それは、どこからの借り物でない日本の風土に根差し、日本人の感性によるこよなく独創的、創造的な建築、庭園の造形で、同時に近代合理主義にも通じる普遍的価値をも有するものであると考えた。そして、前述のようにその後日本の各地を訪れる折につけ、我国

の伝統文化に深く根ざしたものと、いわゆる多くのまがいもの（イカモノ）とが彼の透徹した鑑識眼により峻別されていったが、そのような中で、彼が深く感動した桂離宮の源流ともいえるべきもの、伊勢神宮に出会った訳である。

タウトが伊勢神宮に見たものは、我国の伝統文化の形成に多大な影響を与えてきた仏教・仏教文化に対して、それらの伝来以前の正に我国の伝統文化の原点ともいえるべきものであり、我国固有の風土から生れた自然への畏敬の念から生れた我国固有の宗教である神道の社として具現化し、結実したものであった。

ちなみに、神宮の式年遷宮の制度が定められたのは天武天皇の御代で、一回目の式年遷宮が行われたのは、次の持統天皇の御代、六九〇年とされているが、当時はすでに大陸より外来宗教としての仏教が移入され、また大陸から当時の様々な先進的な技術、制度なども移入されていた。

壬申の乱の後、天武、持統天皇の御代において、大陸の例をもととした様々な国家体制の整備が図られた中にあって、神宮の式年遷宮制も確立された訳であるが、以上はとりもなおさず、積極的に大陸より新たな宗教としての仏教や新技術、新たな国家体制を整備するための諸

制度を取り入れる一方で、自国のアイデンティティを失うことのないように、自国の伝統文化の原点をしっかりと継承して行くための制度を整備して行くこうとする意図の表れであると解することができる。

当時、既に仏教の伝来に伴う新たな建築様式・技術による法隆寺などの大伽藍が建立されている中であって、敢えて我国固有の建築様式・技術による萱葺き、掘立柱による社殿の継承を意図したのであり、式年遷宮制が制定された天武天皇の御代においては薬師寺が建立されていることから大陸からの外来文化の移入に積極的に取り組むと同時に自国の伝統文化をしっかりと継承して行うとする明確な意図が窺われる。

古来、我国は外来文化を果敢に摂取する一方で、それらを我国固有の伝統文化を基として咀嚼し我国独特の文化に創造することを常としてきたが、国際化が益々進展する今日、自国の固有の伝統文化をしつかり理解し継承して行くことは益々その重要性を増すものである。ことはいうまでもない。その意味で、我国のアイデンティティの原点とも言えるものを継承して行く式年遷宮が益々その重要性を増すものであることは論を待たない。

タウトが神宮の社殿をみて、深い感銘を受け、高く評価したのは、正にそれが、外来文化等の影響を全く受け

ていない、日本の固有の風土に根差したものであることによることと、更にその建築的価値が真に比類のない程に高いものであるということによつてゐる。

神宮の社殿が、我国固有の宗教である神道の社殿として、仏教寺院の建築様式等の影響を全く受けたものでないことは当然のこととも考えられるが、その原型が高床式穀倉であることには、重要な象徴的意味があると考えることができる。自然を敬うことを根幹とする神道にあつて、人の命を支えてくれる穀物、特に米は、自然の恵みの象徴的な神聖なものであり、それを貯蔵する穀倉が神聖な社殿の原形となつてゐることには、深い意味があると感じざるを得ない。タウトは以上のことについては、「これらの建築物はきわめて控え目に見えるので、これに崇敬の誠を致すことは不思議にさえ思われるであろう。実際この社殿はありふれた農家をさへ想起させる。田圃のなかに建つてゐるきわめて素朴な萱葺の作事小屋などを見ると、伊勢にある古典的建築物もこれと同じ本質を持つてゐるのかのような印象を与える。」と記した上で、更に、「しかし、このことこそ、これらの建築物が古典的偉大さをもつゆえんである。それはこの国土、この日本の土壌から生い立つたもの、いわば、稲田のなかの農家の結晶であり、この国とその土壌との力を治めた

聖壇、すなわち真の「神殿」だからである。」と記してゐる。以上のことは、最も崇高で神聖な御社殿が日本のどこにでもあるような極めて素朴な農家の作事小屋に通じるように見えると記して、それが故に正に日本の風土から生れ出たものであり、社殿の原型として最もふさわしいと述べてゐるのである。

ここで指摘されていることは、単に社殿が荘嚴に見えるところか、重厚に見えるところかという問題以前の、我国固有の宗教である神道の社殿の原型についての最も本質的な前提条件ともいえることについて述べてゐるものと解することができる。

そして、この社殿の価値は、その原形が我国固有の風土から生れたものであるということに留まらず、それを基として極めて建築的にも高い価値のものに昇華しているという点にあるということが出来る。すなわち、古代の素朴な高床式穀倉を基としながら極めて建築的に優れた構造、造形のものへ日本人固有の感性により創造されたものとなつてゐるのである。

タウトは、この点について、「構造はこの上もなく透明清澄であり、また極めて明白單純なので、形式はそのまま構造となる。ここに用いられている材料も、香りの高い見事な檜材、屋根に葺かれた萱、堅魚木の先端には

めた金色の金具から建物の基底部におかれた清らかな玉石にいたるまで、浄潔の極みであり、あくまで清楚である。構造と材料とは至純であると共に見事な釣合を構成しており、実に一切のものが純粹の極致である。」と述べている。

そして、これらのことは、一面で近代合理主義の考え方にも通じるものであるとともに、無論、それに留るものではないと考えられる。それは、我国を代表する近代建築の巨匠であるとともに、その作品に我国の伝統を近代的感觉で表現することにも挑戦したことで知られる故丹下健三が、伊勢における我国の伝統文化の原点を土着的な力強い趣きを持つ縄文文化に洗練された趣きを持つ弥生文化が融合したものとみて徹底的に研究し、彼の創作の原点の一つとしていたことから伺い知ることができる。

以上についてタウトは、実に清楚、明澄、単純、簡淨、自然の素材に対する誠実（一切の塗装等も施していない）等の理想化された観念によるものであるとし、また、「侘び」とか「さび」といった観念に寄りかかるところもない全く理性的な、純粹・簡素の極致といえるものがあり、日本文化のもつ一切のすぐれた特性が渾然と融合して一つの見事な結晶をなしているとも述べている。

ブルーノ・タウトは、建築家として神宮の社殿の価値の意味の神髄を余すことなく的確に述べていると考えられる一方で、その意味するところは、単に建築的な意味に止まらず、そこに結実している古代より現代そして未来に継承されて行く日本の伝統文化の根元に係わる日本人固有の感性の意味についても述べているものと考えることができると述べている。

参考文献

- 『建築藝術論』ブルーノ・タウト著 篠田英雄訳 岩波書店
刊
『日本タウトの日記』ブルーノ・タウト著 篠田英雄訳 岩波書店刊
『日本文化私観』ブルーノ・タウト著 森佛郎訳 講談社刊
『ニッポン』ブルーノ・タウト著 森佛郎訳 講談社刊
『日本美の再発見』ブルーノ・タウト著 篠田英雄訳 岩波書店刊
『ブルーノ・タウト 日本美を再発見した建築家』田中辰明 著 中央公論新社刊
『伊勢神宮―森と平和の神殿』川添登著 筑摩書房刊
『木と水の建築 伊勢神宮』川添登著 筑摩書房刊
『伊勢―日本建築の原形』丹下健三・川添登・渡辺義雄編 朝日新聞社刊
『日本の美術 伊勢と出雲』渡辺保忠著 平凡社刊
『人間と建築 丹下健三著』彰国社刊

『建築様式の歴史と表現』 中川武著 彰国社刊
『風土』 和辻哲郎著 彰国社刊
『美と宗教の発見 創造的日本文化論』 梅原猛著 筑摩書房
刊

(神宮式年造営庁技術総監)